

# 巻頭言

## 築Eびくり

### 造形遊びとの出合い

白井嘉尚

くしくも二年前、教育学部の附属幼稚園園長を併任することになりました。大学では美術を専攻する学生に、絵の見方や描き方を指導してきたわけですが、その延長上に幼稚園の現場が待ちうけているとは思ってもみないことでした。幼児教育の基本が「遊びを通じた教育」であり、また「環境を通じた教育」であることすら知らない私でしたが、その意味するところに、美術分野とつながる内容が含まれていると思うようになってきました。そもそも美術に唯一の答えもなく、定められた到達点もありません。表現者がおかれた環境に根をはって、過去と対話し、同時代の息吹に触れながら、一人ひとりの表現を追い求めるところに充実があります。そのためにも、自他への強い好奇心やみずみずしい感受性、そして表現に向けた主体性や能動性が身につけていなければならぬでしょう。

そういえば幼稚園の砂場遊びは、絵を描くことによく似ています。自分の想いが事物



を媒介にして形となり、そこからまた想いが発展する、それは創作活動の核心です。砂場の園児に刺激されたわけではありませんが、私が一年目に手がけたことに築山づくりがあります。大きな築山があれば、これまでなかった遊びが誘発され、身体機能の発達が促されるということで、PTAの協力のもと二度の造成作業で40tの土を入れ、二つのピークをもつ築山を設けました。美術畑の園長ということで、形の美醜にいささかの配慮はしましたが、何より園児が思わず登りたくなるような小山であることを目指しました。また二つのピークの間にテラス的なスペースを設け、遊びの広がりを期待しました。難しかったのは高さや傾斜からくる遊びの多様性と安全性との兼ね合いで、その点については、30tの土を入れた最初の造成で、低めの高さ、緩めの傾斜とし、遊びの様子を四か月ほど観察した後、二度目の造成で、より高く、やや急な傾斜の築山としました。予想外のこととして、同じ土を盛ったはずなのに、後から入れた土の締まりにくいことがありました。風雨や園児の活動で築山はおのずと姿を変えていくと思っていました。その見通しが甘いことにすぐ気づかされました。子どもたちは表面の亀裂に砂場遊びのシャベルを差し込み、斜面を掘り崩し始めたのです。見上げるような小山を崩すことは、幼児にとってどんなに手応えのある大仕事でしょう。また二学期に園庭開放を行いました。その大きな山に、おぼつかない足取りの未就園児が挑戦し、中腹から、下で待ち受けるお母さんがけて駆け下りていったこともうれしい誤算です。

ところで、幼稚園での造形活動への私のかかわりは、いまだ、ささやかな実践しかな



い状態です。これまで数回行った「土粘土コーナー」、また学年末の生活展における「お絵描きコーナー」といったところでした。しかし、それでも感嘆すべき粘土作品、また大胆で伸びやかな絵の数々に出合うことができました。造形活動の特色として、新しい素材との出会いによって新しい感覚が芽生え、活き活きとした表現に結びつくということがあります。人によっては新しい素材に戸惑いを覚えることもあるでしょう。そんな場合でも造形活動には、制作を繰り返すうちに素材になじみ、また感覚にも弾みがついて、イメージがイメージを呼ぶといった作用があります。たとえば、絵の具と太い筆を用意すると、それに不慣れな幼児であっても、やがていつものクレヨンやマーカーと違う、色の美しさや筆のおもしろさになじんで、近代絵画の巨匠のような迷いのない描線を楽しむようになってきます。

私にとって難しいのは、造形活動のさなか、幼児のその時々々の心のサインをキャッチできるかということです。印象的な例としては、「園長先生のお絵描きコーナー」を設置した時のエピソードがあります。そのコーナーは、段ボールを組み合わせた10mの内壁をもつ小部屋状のものでした。保育時間中の作業でしたので、何人かの幼児の、手伝ってくれているのか邪魔を楽しんでいるのかわからない出入りの間、一人の年長児N子だけが、ずっと手伝ってくれました。壁面が完成し、白い大きな紙を貼りめぐらせた時、その場にいたN子が誰よりも早くクレヨンを持って画面に向かったのですが、あろうことか、10mの壁面に大きなト音記号を幾つも幾つも書いたのです。翌日には筆と絵の具



を準備し、新しい紙で場を整えたところ、真っ先にやってきたのがN子でした。N子は筆をタクトのように持つと踊るようなそぶりをし、そして筆を紙に当て、壁一面に波打つように線を引いていったのです。そしてひとしきりそんな振る舞いをする、何事もなかったかのようにほかの子と一緒にたってお絵描きを始めました。画家の中には新しい作品を作る際に画面にまず染みをつける、彫刻家であれば素材の石にまずはドリルで穴をあけるなどの「儀式」をする人がいます。N子の場合、それは大きな画面を前にした時のうれしさの表れ、それとも、私が行いを制止するか否かを無意識のうちに試していたのでしょうか。あるいは、気持ちをお絵描きにシフトする「儀式」のような振る舞いだったのでしょうか。

そのように、ひと口に造形活動といっても、一見「造形」には見えない表れもあるでしょう。また心のどこかにブレーキがかかっているかのように、活動の波に乗れない子の存在も気になるところです。いずれにしても、そのほか、幼児の造形との出会いは、私にとって新鮮な発見があって興味はつきません。いわゆる図式画期の記号のような絵であっても、そこには喜びの感覚が宿っています。結果としての見栄えの良さに傾斜する作品主義の弊害はいうまでもありませんが、感性が育ち、造形への衝動がわき上がるこの時期の表現がかけがえのないものであることを思えば、幼年期の心の躍動が形として残る「作品」の意義について再考すべきではないでしょうか。

(静岡大学教授・静岡大学教育学部附属幼稚園園長)